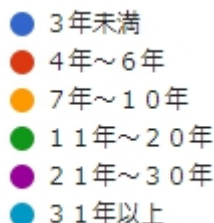
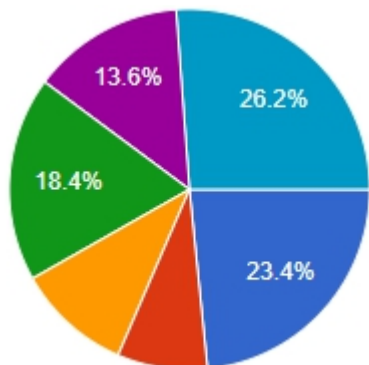


令和5年度郡教育研究総会 アンケート

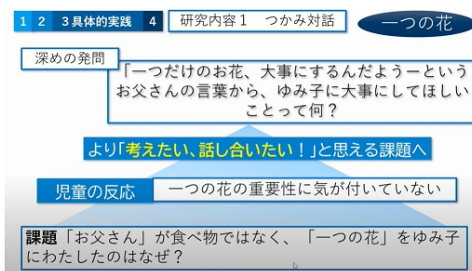
【経験年数】



3年未満	23.4%
4年～6年	8.1%
7年～10年	10.3%
11年～20年	18.4%
21年～30年	13.6%
31年以上	26.2%

①プレゼン発表を聞いて学んだことや自分でも生かしてきたいと思ったこと

- 話し合い活動を仕組むタイミングや発問の精選、交流活動を通して考えが深まり広がるように、より多くの考え方や考え方や見方を引き出す方法・支援の工夫に努めたい。
- 目指す子どもの姿をいかに具体的に描いて実践するかということを大切にしていきたいです。
 新しい指導法に取り組む若い先生方が多く、児童の学力向上のために試行される姿がよい。課題、対話、まとめと普段自分が授業で大事にしているポイントを改めて整理でき、若手の先生にとっても参考になると感じました。
- 子どもの実態を把握して、子どもが学びたいと思えるような学習活動を工夫し、学びの方法を自己選択し、学ぶ楽しさを体感させることが教師の役割であることを改めて感じた。
- 目の前の子どもたちの実態に合わせて指導方法を考え実践する姿に感銘を受けました。特に特別支援では、個々に違うため、指導方法も異なると思います。指導が難しい中、よく子どもたちを捉えてみえると感じました。
- 対話活動を取り入れた授業実践を聞き、自己表現が苦手な生徒に対して、考えたいと思う発問を用いることが大切だということがわかりました。また、その発問は、子どもの思考を揺さぶるような深めの発問を用意することによって、子どもは、対話したい気持ちになるのだと分かりました。
- 仲間と学び合う楽しさが味わえるように指導を工夫している点や児童が必要感を持つことができる授業づくりの仕掛け、授業の中により児童の主体性を引き出すような対話活動を入れていきたいと思っています。「子ども達は楽しければすすんでできる」がとても印象に残りました。
- 課題としてあった、対話の中での根拠の入れ方は私も悩んでいます。自己内対話の時間をとることができたら出来なかったりしてしまうのでしっかりと考えを処理するという狙いを持って取り組まなければいけないと思った。
- 国語科では、初発の感想を活かした課題化、話し合いたいと思わせるような深めの発問など、意図的に計画的に単元を組み立てることが大切だと改めて学びました。また、対話についても「話
- 本校では、語彙力や対話力が十分に身に付いていない生徒が多いことが課題になっています。この課題を解決するために、来年度は国語力を伸ばすための研究実践を行う予定です。馬淵先生の実践をお聞きして、「自己内対話」に興味をもちました。自分の考えをアウトプットすることは、学びに不可欠です。成長段階に応じた場の設定の工夫を実践していきたいと思っています。
- 人との関りが苦手な自閉・情緒障がい学級の児童にとって、相手意識をもって対話をするとはどういうことか、そもそも主体的に学ぶとは、どのような姿なのかについて、教師が児童の具体的な姿を想定して学習を積み重ねていきたい。



- ステップを踏んで、対話の仕方を指導したことで「対話が好き」という児童が増えたのだと思います。また、対話をするだけでは理解が深まるころまではいかないと思いますが、馬淵先生の実践のように自己内対話を行うことによって、自分の言葉になったり自分の理解が深まったりするのでとても有効だということがわかりました。自分に戻すことを意識して指導していきたいと思いました。
- 授業の中での仲間との対話によって「わかる」「楽しい」がつかめた生徒は、今後もその先生の授業が楽しみになるのではないかと感じた。私も、生徒に楽しみな授業が仕組めるよう、更に教材研究を大切にし、授業づくりがしていけるよう努力したいと思った。
- 来年論文を書くので、論文のことを意識して聞いていました。テーマの設定や、論文を書いていく構成などが参考になりました。来年度を含め、今後の論文作成に生かしていきたいです。論文の書き方のイメージが湧きました。

②シンポジウム発表を聞いて学んだことや自分でも生かしていきたいと思ったこと

- どの実践も児童の実態と教師の熱い願いが基底にあった。教師としての熱い思いを聞かせていただきました。子どもの姿で変容が見てとれるよう、今後も授業改善に尽くしたい。
- これからの社会を生き抜く生徒の育成には、「自己調整学習」の力が必要だと感じた。学習の仕方は人それぞれであるので、生徒が自分に合った学習方法を見つけ、取り組んでいけるよう、画一的な学習指導から抜け出したいと思った。
- より良い教育の実践に取り組んでいらっしゃる先生方を、事務職員としてサポートできるようにしていきたいです。
- ご自分の実践の主張点やそれに伴う変容等を明らかにされてみえたことが子どもたちの成長に反映されていくことを感じました。また身近な人からもっと学ぶ姿勢を持ちたいと思いました。
- 子ども達が、自分の良さを自覚して成長するため、よりよい人間関係が必要であること、そのためにどう支援していくかを考えないといけないと思いました。
- 児童生徒の実態は、それぞれ違っても、実態把握から目標の設定、具体的な手立て、指導と評価、そして目標の見直しや再設定など、PDCA サイクルが基本であることを再確認できました。発表者が堂々と、アピールポイントや今後の課題を述べて見える姿に、頼もしさを感じ、とても嬉しく思いました。
- ただ聞いているだけ、やっているだけの授業では子どもたちもつまらない。しかし、興味をもったことを自分で決めた学び方で学んでいくことで主体性も生まれ、学びも深まり、「楽しい」「できる」と感じることができると分かった。最初は難しくても継続していき、児童の主体性と学びを深めていくことが大切だと感じた。
- 特別支援教育の論文の中で、自立活動でのソーシャルスキルトレーニングについての話が印象に残りました。成功体験の積み重ねは自分もとても大切だと考えていたので、改めてトレーニングによって自己の感情をコントロールすることに効果的であることがわかりました。
- 3人の方の話を聞いて、学校生活を通して、生徒の今伸ばす力だけでなく、これから生きていくうえで大切にしていって欲しいという願いをもった指導は、自分にも生かしていきたいと感じました。
- 若い世代の先生方の頑張りや心強さを感じました。若い先生方が意欲的に実践に取り組める環境をつくっていきたく感じました。現在働き方改革が叫ばれ、勤務効率を求められるようになってきたが、その中でも熱意をもって指導に当たりたいと感じました。
- 学ぶ楽しさ・対話活動を通して身に付いた力を、具体的に数値化できると説得力が更に増すのかなと思いつきながら聞いていました。
- 社会科の発表では、振り返りの仕方や視点を提示されているとのことで、これは他の教科でも活用できると感じた。私のクラスは「感想を書くこと」が苦手であり、1人ではなかなか書けない。そこで、常にこちらから視点を提示していた。それが正しいのかずっと迷っていたが、先生の発表を聞いて、私のやっていることは間違っていないことを確認することができた。これからも視点等を意図的に提示することで自分の意見を持つことができるようにしていく。
- 特別支援の実践では、SSTを通して、トラブルが起きたときに自分で感情のコントロールをでき



るようになったことは、自立活動として大きな成果だと思った。ここでは、実際に練習する場面を複数回設け、成功体験を積みせることで自信を持たせて、自己の感情を理解するまでできたことは素晴らしいことだと思った。

- 学級活動の実践では、自分たちで問題を見つけて解決したいという気持ちにさせ、それぞれの実態の違いもありながら、ユニバーサルデザインも取り入れながら、話し合い活動が充実されていたのは、知的学級でありながら、すごいことだと感じた。実践を発表された先生とは一緒に勤めたことがあります。特別支援学級の教育に前向きに取り組んでいる姿に刺激を受けました。
- 誠実に児童生徒に向き合い努力をして実践をまとめられたことがよく分かりました。これからは児童生徒のために頑張っていたいただきたいと願っております。目の前にいる子供を中心に据えて、実践を積み上げて見えたことがよく分かり、同時に私たちは実践者であるべきだとも感じました。
- 特別な人が入賞したというのではなく、自身の指導についての丁寧な振り返りの行い方が素晴らしいと感じた。発表内容の裏には、成功例ばかりではなく様々な失敗例もあったと思う。しかし、「どう改善したらよいか」を真摯に考えた結果が、今回の実践論文となり、若い先生が他の自信につながっていったのだと思う。年齢ではなく、教育に対する熱量の大きさだと感じた。
- ぜひ実践論文を書いていきたいと思った。文章化して、整理していきたい。三人の先生方が子どもと関わる上で感じたことを課題にされていることがわかりました。わかりました。自分も書くときにはそうしたいです。
- 自己調整型という授業スタイルを取り入れて、来年度の町公表会に生かしていきたい。研究のためでなく児童のための実践を大切にしていきたい。
- 杉山先生が、若い先生と一緒に教材研究を行ったと話してみえて、すごいなあと思いました。若い先生が増えていくので、経験のある先生で支えていかなければいけないなと思いました。
- 働き方改革の面を考えながら、最も熱意をもって活動したいものへの研究をこれからも続けるようにしたい。
- ①自己調整学習（校内研究（算数科）の取組を社会科に応用したこと。②特別支援の児童の困り感に名指した実践であったこと。③ユニバーサルデザインの積極的な導入。④子供たちの側に立った実態の捉え。⑤子供たち同士がお互いに優しく声掛け合いで優しい人間関係の醸成。⑥個に焦点を絞った成長の捉え。
- どの先生ということではなく、やはり論文という形で意図して実践を重ねていくことで課題や成果がクリアになることがあるのだと思った。論文という形ではなくても、自分の中で課題やテーマを設定して実践に臨むことが大切だと感じた。
- 3名の先生方の実践の願いが、どなたも子どもの姿で描かれていたところが素敵でした。目の前の子が、この先、幸せに生きていけるための力を少しでも高めようとする日々の営みが大切だと再確認できました。
- 経験年数の浅い先生が誠実に自己研鑽する姿を見て、日頃の自分を反省した。今後はもっと積極的に助言したい。

③総会の中での話（教育会副会長様・小中校長会長様・審査員長講評・教育センター所長様）を聞いて学んだことや自分でも生かしていきたいと思ったこと

- 教師が互いに学び合うことが、日々の仕事に追われているとなかなかできずにいるが、やはりお互いに良さを知り高め合える教師集団になることで、学校の教育力が上がっていくと感じた。自分としては、若手に教える立場ともなってきたので、さらに進んで交流を行い、学び合いの場を持てるようにしていきたい。所長様の話にあったように、働き方改革の中、教材研究に時間を割いていけるような学校風土や職員集団でありたい。今後も子どもたちの自ら学びとろうとする姿を育てるための手立てや教師の気づきを大切にした実践を積み重ねていきたい。
- 多くの論文を読み、公正に審査をしていただき、ありがとうございました。先生方のこれからの励みになったと思います。子どものために様々な教材研究をして改善していくことが改めて大切だと思いました。来年度の自分の論文も、子どものために研究を頑張りたいと思いました。
- 論文という形で、言語化することにより、次につながっていくことの重要性を再認識できた。先輩方の授業から学べることをたくさん吸収したい。
- 職場の多くの先生の実践に学び、その学びをどれだけ児童・生徒に還元できるかが大切だと感じました。忙しくても研鑽しないとダメだと感じた。



- 思いを育てていくという言葉が強く心に残りました。自分の考えを持てる子、考えることをやめない子を育成していきたいと思います。そのために、間違っていてよい、考えることに価値があると感じてもらえる指導を続けていきたいです。
- 実践論文を通して、子供たちが「考えたい」や「できた」「わかった」と感じることでできる授業を考えることができると分かりました。来年度は、自分がどんな子供たちを育成したいのかを考えながら実践論文に取り組んでいきたいと思いました。
- 自分の考えを言葉にするというのは、とても大切であると感じた。時間はかかるが、書いてみることで自分の考えを整理することもできるし、客観的に伝えたいことが何であるかを明確にすることもできる。口だけであると、曖昧な表現しかできず、子ども達に伝わりにくくなる。そういう意味でも、言葉にするということを大切にできるようにしていきたい。
- 働き方改革という言葉が言われる中で、より時間ができたからこそ、目の前の生徒に対して、どんな教育が必要かを考えるのも大事なのではないかと思います。生徒が安心して学校生活を送るうえでも、教師が今後も学び続けることが大切であると思いました。日本の教員の学ぶ姿勢が世界から注目されているというお話を聞き、働き方改革の一方で避けられがちな研修について前向きに取り組もうという活力をいただきました。
- 教育会副会長様・小中校長会長様・審査員長様・教育センター所長様のお話を拝聴いたしまして、それぞれの方々が、いかに児童・生徒一人一人の子どもたちの幸せを願い、学力が身につくために、誠心誠意尽くして、日々の教育活動に取り組まねばならないかという強い熱意を感じ、私もこれからの教育活動の中で子どもたち一人一人を大切にしていかなければならないと、思いました。
- 今年度、実践論文を書いたということもあり、自分自身の考えを言語化する難しさを感じた。しかし、お話にもあったように、言語化するという作業を通して、自身の考えが整理され、考えがよりまとまると私も考えた。これからも実践論文に挑戦していきたい。
- 実践論文を作成することを通して、教員の考えが整理され、それが子どもたちに還元されるという当たり前のことだが、指導案の作成の本質が改めて理解できた。このお話を聞いて、実践論文に自ら挑戦する教師が増えてほしいと思います。
- 論文の執筆は、自己の視野を広げたり、新たな視点に立って考えることができる最適な機会だったと感じた。この執筆で、児童と向き合い、一緒になって考えていくことができたので、今後の教員人生においても、大切にしていきたい。

揖斐郡教育研修センターでは令和3年度より郡実践論文ライブラリーをアップし、毎年実践論文集を各校に配付しています。その活用に関してお答えください。

実践論文ライブラリーの活用・閲覧状況	割合
今回総会に向けてお願いしたHPに掲載したR5の実践論文優秀賞作に目を通した。	36.0%
学校に送付された過去の郡実践論文を読んだことがある。	59.1%
令和3年度～令和5年度のHPの実践論文ライブラリーを閲覧したことがある。	24.6%
実践論文集やライブラリーを日常の実践や実践論文執筆の参考にしたことがある。	20.3%
実践論文集やライブラリーを参考にして授業や実践を行ったことがある。	14.6%
実践論文集もHPの実践論文ライブラリーも見なかった。	17.1%

郡教育実践論文集を読まれたことがある先生方が60%、郡センターHPの実践論文ライブラリーを閲覧したことがある先生方が約25%、今回の研修総会に向けて優秀作の論文に目を通してくださった先生が約36%、また実践論文ライブラリーを自分の論文の執筆の参考にしたり、授業や実践に活用された先生方が約35%と実践論文ライブラリーを活用していただける先生方が増えております。また本年度の教育研究総会の先生方の感想の中には過去に比べてもプレゼン発表やシンポジウム発表、ご講話をいただいた教育長様、校長先生方、センター所長様のお話から学んでいこうとする強い思いが感じられました。揖斐郡教育研修センターでは授業ライブラリーも含めてこうした揖斐郡の先生方の資質や指導力の向上のための取組を充実させていきたいと考えております。よろしくお願い致します。